

特集 1. 緑のカーテンを過大評価する心

最終回 視線を遮る緑のカーテン**

平成 21 年 3 月 27 日

□ そのデメリット

「外の様子が見えなくなる」、「暗くなる」、「通風が阻害」。緑のカーテンの効用ばかりに注目していても、現実的には、こうした欠点を避けて通ることはできません†。

特に「外の様子が見えなくなる」、「暗くなる」という欠点は、住み手の心理に直接影響を与える要素なので、決して軽視はできないのです。

中でも特に、「外の様子が見えなくなる」という特徴(図 1)は、緑のカーテン独特のものになります。ですので、この点が許容できるかどうかは、必ずチェックしておいた方が良いでしょう。



図 1 緑のカーテン越しに外を見ようと試みる

□ つながりのデザイン

これと対照的に、スタレやヨシズでは、外の様子が全く見えなくなってしまうことはありません。緑のカーテンのように素材同士が重なり合うことがなく、視線が抜ける隙間が生じるからです(図 2)。

そのため、室内側から見れば、一種の半透明スクリーンのように感じられるのです(図 3)。

このように日射は遮りながら、外界や庭との視覚的なつながりは遮断しない。外部と内部は緩やかにつながっている。こうした豊かなインテリア空間(図 3)は、視線を遮る日除けではなかなか実現しにくいのです。

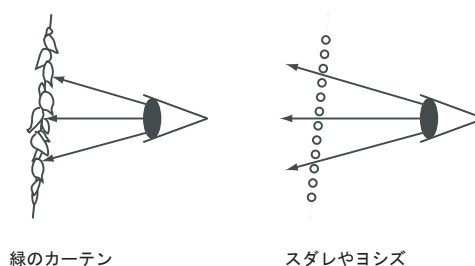


図 2 日除けと視線の抜け方

** 初めて記事をご覧になる方は、必ず「[利用規約](#)」をご確認ください

† 詳しくは第 1 回 [緑のカーテン—その利用実態](#)を参照されたい。

□ 視線の抜け

外の様子が見えないということは、視線が外へ抜けていかないことを意味します。視線の抜けの無い部屋では、あまり空間の広がり感を得ることはできません。むしろ、閉鎖感、圧迫感を感じてしまうのです(図1)。

こうした閉鎖感に耐え切れなかったためか、緑のカーテンを間引きしたまばらな状態で設置しているお宅も少なくないのです。この状態では、当然日除けとしての効果は期待できなくなるのです。



図3 夏座敷の室礼

出典：高橋建具製作所 「夏の建具 簾戸(すだ)のご案内」

□ 緑が重要なのではない

自然破壊、人工物に対する安易な対立思想。こうした価値観の影響か、我々は、緑を使うこと自体に価値を見出してしまいがちです。しかし、本当に大事なことは緑を使うことではなく、日差しをコントロールし放射環境を改善することにあるのです。

ですから、例えば、アルミ製外付けブラインド[†]などの人工素材の日除けを使った場合でも、優れた遮熱効果は得られるのです。

□ 社会的風潮

こうした実態に基づいて考えれば、必ずしも緑のカーテンは最良の防暑対策とはいえなくなりません。特に手軽さと視線の抜けを考慮すれば、スタレというのも有力な防暑対策のひとつとなるのです。

それでも、「視線を遮る緑のカーテン」にこだわってしまうのは、学者も消費者も、環境問題、エコロジーを重視する風潮にのめり込み傾向にあるからなのでしょう。過ぎたるは及ばざるが如し。社会的風潮にもある程度距離を置く、客観的な姿勢が堅実な家づくりへの近道だといえるのです。

*記事の感想をお聞かせください

[アンケート画面へ](#)

[†]日本では普及していませんが、欧州ではよく使用されます。通風も阻害されません。ルーバーテック社など参照。

【寄付歓迎】当コラムは無料ですが、ご寄付は歓迎します。詳しくは[ご支援依頼](#)をご覧ください。